

ポストコロナ時代のロシア語教育¹

一外国語専門課程学生が求める講義とは： 京都外国語大学ロシア語学科を例に一

水野 庄吾²

1. はじめに

2020年4月、京都外国語大学にロシア語学科が開設され、第1期生となる20名が入学した。日本で新しいロシア語学科が誕生するのは、実に約半世紀ぶりであるという。約半世紀ぶりのロシア語学科開設という記念すべき出来事は、奇しくも、未曾有の事態とも呼ぶべき新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、他大学同様、4月からの前期期間は、Microsoft teams を用いたオンライン講義のみとなった。しかし、後期からは、週に2コマ（正確には、1コマが初回講義から、もう1コマは11月末から）が、オンラインとオフラインを同時に行う、いわゆるハイブリッド型の講義となった。筆者は、幸いにも、後期からのすべてのオフラインでの、つまり対面での講義にTAとして、参加する機会を得た。本稿では、そこで得られたオンライン、オフライン講義、またそれらを併用するハイブリッド型講義のメリットとデメリットを「ロシア語を専攻として学習する学生にとって」という文脈の中で確認する。さらに、京都外国語大学ロシア語学科第1期生にアンケート調査を行い、得られたそれぞれの講義形式についてのメリット、デメリットと学生のロシア語学習の動機、学習目標、さらには卒業後の将来設計を考慮に入れることで、オンライン講義時代を経験した学生が、今後どのようなロシア語の講義を求めるか、そして、その講義に少しでも近づけるためには、ロシア語教育はどう進んでいくべきかという考察を行いたい。

本稿の構成は、以下の通りである。まず、次節では、京都外国語大学ロシア語学科の学生に行ったアンケート調査から得られた、学生が考えるオンライン講義・対面講義（ハイブリッド講義）におけるメリットを、また3節では、同様の調査から得られたオンライン講義・対面講義（ハイブリッド講義）のデメリットを確認する。そして4節で、学生のロシア語学習動機、学習目標、さらには、卒業後の将来設計を確認し、5節では、本稿で調査対象とした京都外国語大学ロシア語学科の学生には、対面講義（ハイブリッド講義）の

¹ 本稿を執筆するに際して、多くの方から有形無形のご支援をいただいた。とりわけ、京都大学准教授の堀口大樹先生、大阪大学准教授の横井幸子先生のお力添えなしには、筆者のような門外漢が、このような論文を執筆するということは不可能であった。ここに謝意を示したい。また本稿では、京都外国語大学ロシア語学科1期生20名に行ったアンケート調査が大きな意味を持つ。アンケート調査に協力していただいた学生にも謝意を示したい。そして何よりもこのような機会を与えてくださった京都外国語大学ロシア語学科の先生方に深く感謝の意を記したい。なお、言うまでもなく本稿のいかなる誤りも筆者の責任である。

² 京都外国語大学ロシア語学科TA・京都大学大学院人間環境学研究科修士課程1年

方が学習効果が高いと考える学生が多いということを指摘する。この結果は、東洋大学現代社会総合研究所 ICT 教育研究プロジェクトが行った「コロナ禍対応のオンライン講義に関する学生意識調査」で、オンライン講義に対して肯定的な結果が得られたという事実とは異なるが、これについては、京都外国語大学ロシア語学科の多くの学生が「ロシア語を学びたい」という積極的な学習動機を持ち、かつ同時に多くの学生が、ロシア語の学習目標・卒業後の将来設計として、ロシア語を活かしたいと考えていることに関連するということを指摘する。最後に6節で、今後の専門課程のロシア語の講義としては、たとえ、オンラインで講義を行うにしても、オンライン講義のメリットを可能な限り活かした上で、極力、対面講義に近い形の講義を目指すべきだという結論を提示する。

2. 学生が考えるオンライン講義・対面講義（ハイブリッド講義）のメリット

本節では、筆者が京都外国語大学ロシア語学科の学生を対象に実施したアンケート調査から得られた、学生が考えるオンライン講義・対面講義（ハイブリッド講義）のメリットについて確認する。ただし、本節と次節で紹介する、学生が考えるオンライン講義・対面講義（ハイブリッド講義）のメリット、デメリットには、2種類のものがあることをあらかじめ確認したい。被験者である学生には、後期から始まった対面講義に原則、参加している者と1度も対面講義に参加したことがない者とに分かれる。この差は原則、オンライン講義がもつメリット、デメリットを考える上では、峻別する必要はないと考えるが、後者の学生は、大学での対面授業を1度も経験しておらず、オンライン講義と対面講義を比べることができず、対面講義のメリットについては、回答できないということは、あらかじめ確認しておきたい。しかしながら、後者の学生は、全員がオンラインで受講するオンライン講義とは異なり、対面で受講している人がいる中でのオンライン受講ということで、ハイブリッド講義のメリット、デメリットを確認する上では、重要な意見となる。このことを踏まえた上で、オンライン講義へのメリットとして得られた回答をまとめると、以下、表1のようになる。

表1 オンライン講義のメリット（複数回答可）³

| メリット | 回答人数 |
|----------------|------|
| 時間的余裕がある | 8 |
| どこでも受けられる | 4 |
| 人目が気にならない | 2 |
| パソコンに慣れることができる | 2 |

³ 「時間的余裕がある」の回答の中には、「通学時間がかからない」、「身支度をしなくて良い」、「睡眠時間が確保できる」という回答も含めている。また「どこでも受けられる」の回答の中には、「実家から受けられる」などの具体的な回答も含めている。

| | |
|-----------------|---|
| 集中して受けられる | 2 |
| リラックスして受けられる | 2 |
| 授業を録画できる | 2 |
| 先生が1人1人を確認してくれる | 1 |
| 交通費が節約できる | 1 |

表1からもわかるわかる通り、「時間的余裕がある」と「どこでも受けられる」という回答が多数派であった。ここで着目すべきは、ほとんどの回答が、講義の内容、すなわち、ロシア語に関係することではなく、そもそも対面講義では、明らかに得られないメリットばかりであるということである。例えば、「パソコンに慣れることができる」、「集中して受けられる」、「先生が1人1人を確認してくれる」などは、対面授業にいかせるとも思われるが、回答の中の約半数を占める「時間的余裕がある」「どこでも受けられる」や「交通費が節約できる」は、明らかに対面講義では、得られないメリットである。

一方、対面講義（ハイブリッド講義）のメリットとして得られた回答をまとめると、以下の表2のようになる。

表2 対面講義（ハイブリッド講義）のメリット（複数回答可）⁴

| メリット | 回答人数 |
|---------------------|------|
| 先生や他の学生と実際に会うことができる | 7 |
| 質問がしやすい | 4 |
| モチベーションが上がる | 2 |
| グループワークがしやすい | 2 |
| 黒板が使える | 1 |
| お互いの反応がわかる | 1 |

表2から明らかなように、オンライン講義のメリットと比べ、講義内容、ロシア語学習に直結するメリットが多いことがわかる。例えば、「質問がしやすい」、「グループワークがしやすい」という回答がその最たる例ではないだろうか。オンライン講義でも対面講義（ハイブリッド講義）でも、学生には、通常、同様の質問が浮かぶはずである。その中、オンライン講義では、その質問を解決せず、そのままにしている可能性があると考えれば、今後のロシア語学習に与える影響は少なくないだろう。またグループワークが学習に与える好影響は一度ならず報告されている（e.g., Swain & Lapkin 1998 ; Watanabe & Swain 2008）。

⁴ 「質問がしやすい」の回答の中には、「発言がしやすい」という回答も含めている。「グループワークがしやすい」や「お互いの反応がわかる」など、他の回答と不可分であると考えられるものも多いが、本稿では、このような項目分けを選択した。

3. 学生が考えるオンライン講義・対面講義（ハイブリッド講義）のデメリット

本節では、前節に引き続き、筆者が京都外国語大学ロシア語学科の学生を対象に実施したアンケート調査から得られた、学生が考えるオンライン講義・対面講義（ハイブリッド講義）のデメリットについて確認する。仮にオンライン講義と対面講義（ハイブリッド講義）が表裏の関係を持つとすれば、前節で確認したオンライン講義のメリットと対面講義（ハイブリッド講義）のデメリットは一致し、その逆である対面講義（ハイブリッド講義）のメリットとオンライン講義のデメリットは一致するはずである。確かに、4月に入学し、いきなりオンライン講義のみとなった学生にとって、オンライン講義とは、それまで主に受けてきたであろう対面講義と二項対立の関係で捉えられるものと考えているかもしれない。しかしながら実際には、それぞれが持つ相容れないメリット・デメリットが存在すると考えられる。アンケート調査から得られた学生が考えるオンライン講義のデメリットをまとめると以下の表3のようになる。

表3 オンライン講義のデメリット（複数回答可）

| デメリット | 回答人数 |
|----------------------|------|
| 他の人との交流がない | 5 |
| （先生も学生も）習熟度が把握できない | 3 |
| ネット、パソコン環境に影響される | 3 |
| 発音がよくわからない | 2 |
| 質問がしにくい | 2 |
| 使用するプラットフォームが多すぎる | 2 |
| グループワークがしにくい | 2 |
| オンラインで会話能力が上がるか不安 | 1 |
| 自己管理能力がなければ、何も身につかない | 1 |
| 講義に集中できない | 1 |

予想通り、表2で得られた結果を裏返したものが、回答として多く得られた。その最たる例としては、表2での最多の回答であった「先生や他の学生と実際に会うことができる」と「他の人との交流がない」、「質問がしやすい」と「質問がしにくい」、や「グループワークがしやすい」と「グループワークがしにくい」が挙げられる。しかしここでは同時に、表2からは、予想できないデメリットも浮き彫りになった。例えば、「（先生も学生も）習熟度が把握できない」、「発音がよくわからない」、「使用するプラットフォームが多すぎる」や「オンラインで会話能力が上がるか不安」などという意見である。これについては、具体的に5節で考察することとし、ここでは単に事実を指摘することに留めたい。

次に、対面講義（ハイブリッド講義）のデメリットを確認する。アンケート調査から得

られた学生が考えられる対面講義（ハイブリッド講義）のデメリットをまとめると以下の表 4 のようになる。

表 4 対面講義（ハイブリッド講義）のデメリット（複数回答可）

| デメリット | 回答人数 |
|----------------------|------|
| 通学時間がかかる | 4 |
| 対面の人の声がオンラインの人に聞こえない | 3 |
| シールドで黒板が見にくい | 2 |
| マスクで口が見えず、発音がわかりにくい | 1 |

表 4 から明らかなように、対面講義（ハイブリッド講義）のデメリットはそもそも挙げられた項目が少なく、回答人数も少ないことが分かる。また「通学時間がかかる」以外のいずれの回答も改善の必要はもちろんあるにせよ、コロナ禍における対面講義（ハイブリッド講義）ということで必要が迫られた技術的な面に関するものである。

4. 学生のロシア語学習動機・学習目標

4.1. 学生のロシア語学習動機

本節では、筆者が京都外国語大学ロシア語学科の学生を対象に実施したアンケート調査から得られた、学生のロシア語学習動機・学習目標について確認する。

ロシア語学習者の学習動機について、第 2 外国語として学習する学習者については、宮本他 (2014)、林田&金子 (2014)、金子 (2014) で、ロシア語を専攻とする学習者については、金子 (2017) で報告されている。京都外国語大学ロシア語学科の学生は、当然、後者に近いものになると予想ができる。金子 (2017) は、神戸市外国語大学でロシア語を専攻とする学生の学習動機について、自らロシア語専攻を選んだ以上、学習意欲が高いことが期待されるが、実際には、センター試験の結果でロシア語を学ぶことになった学生も一定数いると述べている。大学の入学には、もちろん、入学試験に合格する必要がある以上、必ずしも希望通りに入学できるとは限らない。そこで確かにロシア語を専攻する学生が総じて高い学習意欲を持っているとは言い難い。しかし日本の入試制度を鑑みると、国公立大学のロシア語専攻より、京都外国語大学のような私立大学のロシア語専攻の学生の方が相対的に高い学習意欲を持っていると予想される。というのも、国公立大学は二次試験日が同日であるため、1つの受験方式で、1校しか受験できないのに対して、私立大学は試験日が違えば、他の大学も受験できる上に、京都外国語大学においてだけでも、ロシア語以外に多くの言語が専攻できるからである。そこで京都外国語大学ロシア語学科の学生のロシア語学習動機は、上記の先行研究で述べられたものとは、異なるものとなる可能性があるだろう。そこで、まず京都外国語大学ロシア語学科の学生のロシア語学習動機を確認する。アンケート調査の結果をまとめると以下の表 5 のようになった。

表 5 京都外国語大学ロシア語学科の学生のロシア語学習動機（複数回答可）

| 学習動機 | 回答人数 |
|--------------------------|------|
| ロシア人の友達がいた | 2 |
| ロシア人と血縁関係がある | 2 |
| ロシア語のゲームがきっかけ | 2 |
| ロシア語に触れて気に入った | 2 |
| バレエを習っていた | 1 |
| マイナーな言語で通訳になりたかった | 1 |
| クロアチアに興味を持ち、似ているロシア語を選んだ | 1 |
| 米原万里の本を読んだ | 1 |
| 杉原千畝を尊敬している | 1 |
| 周りがやっていない言語がやりたかった | 1 |
| 高校でロシア語を学んだ | 1 |
| ロシアに行ったことがあり興味を持った | 1 |
| ロシア史に興味があった | 1 |
| ロシア人のモデルを知って気になった | 1 |
| ロシア人と話したいと思った | 1 |
| 新しいことを始めたいと思った | 1 |
| ロシア・東欧に興味がある | 1 |
| 西洋だけでなく、ロシア・東欧的な視点を持ちたい | 1 |
| なぜか昔からロシアに興味があった | 1 |
| 自分の可能性を広げたかった | 1 |

表 5 を見ると、確かに必ずしも「ロシア語」でなくても良い学習動機も散見される。しかしながら、やはり相対的に見て、他でもなくロシア語が学びたいというような強い学習動機を持った学生が多いと言えるであろう。

4.2. 学生のロシア語学習目標・卒業後の将来設計

第2外国語としてロシア語を学ぶ学習者は、ロシア語学習に負担を感じ、ロシア語習得に対して悲観的で、ロシア語に実用価値があると思っていないという（佐山他 2015；金子 2017）。しかしながら、当然、ロシア語を専攻とする学生は、少なくとも第2外国語としてロシア語を学ぶ学生よりは、ロシア語を学ぶことに価値を見出し、何かしらの目標を持って、ロシア語習得に努めているに違いない。そこで以下では、京都外国語大学ロシア語学科の学生に行ったアンケート調査から得られた、学生の卒業後の目標、将来設計について

確認する。アンケート調査から得られた回答をまとめると以下の表 6 のようになる。

表 6 ロシア語の学習目標・卒業後の将来設計（複数回答可）

| 目標・将来設計 | 回答人数 |
|----------------------------|------|
| 外務省職員として働く | 2 |
| 国際交流・国際協力機関で働く | 2 |
| 通訳として働く | 2 |
| 世界の真実を伝えるジャーナリストやアナウンサーになる | 2 |
| 日露の自動車等の貿易に関わる仕事に就く | 1 |
| ロシアと取引する企業で働く | 1 |
| 大学院に行き、ロシア語学習を続ける | 1 |
| 観光業に携わって、ロシアや外国への旅行客を増やしたい | 1 |
| 航空系企業で働く | 1 |
| 外国語を使って働く | 1 |
| 海外と繋がりのある仕事に就く | 1 |
| 塾の先生として働く | 1 |
| 調理師として働く | 1 |

ロシア語の学習目標・卒業後の将来設計について、確かに、ロシア語やロシアに関係がないと思われる将来設計を持つ学生や、今のところまだ何も決まっていないと答える学生も複数人いた。しかし、表 6 から明らかなように、京都外国語大学ロシア語学科の学生の多くは、ロシア語を活かす、もしくはロシア語学科で学んだロシアに関する知識を活かすことを目標、将来設計として持っている学生が多いと言えるであろう。

5. 考察

本節では、2 節から 4 節で確認したアンケート調査の結果を踏まえ、今後のロシア語の講義のあり方について考察する。

東洋大学現代社会総合研究所 ICT 教育研究プロジェクトが行った「コロナ禍対応のオンライン講義に関する学生意識調査」によると、「この講義をもう一度、受講経験がなくはじめて受けるとすると、今のようなオンライン講義がいいか、対面型講義がいいか、どちらでしょうか」という質問に対する回答として、オンラインに対する学生の評価は、概ね高く、オンライン講義を希望する学生が 40%、対面講義を希望する学生が 33% となったという。しかし、同調査の今後の課題としても挙げられている通り、この調査結果の対象となった科目から語学科目は除外されている。また「演習・語学（英語）科目について、今後オンライン講義がいいか、対面型講義がいいか、どちらを希望しますか」という質問に

対して、演習科目に対する回答としては、45%が対面講義、29%がオンライン講義を希望し、語学（英語）科目に対する回答としては、対面講義を希望する割合、オンライン講義を希望する割合、どちらも言えないと答えた割合がいずれも約30%となっており、演習科目、語学（英語）科目のどちらも、上記の質問の回答より対面講義への評価が上がる事が分かる。この傾向は、本稿で調査したロシア語を専攻とする学生のアンケートの結果でも見られると考えられる。事実、2 節で確認したように、アンケート調査から得られたオンライン講義のメリットは、ロシア語の学習に直接的に関わるものよりも、「時間的余裕がある」や「どこでも受けられる」などという講義内容に寄らないオンライン講義の持つ絶対的なものばかりであった。一方、対面講義（ハイブリッド講義）のメリットとして得られたものは、「質問がしやすい」、「グループワークがしやすい」というようなロシア語学習に直結するものが多い。また最も回答として多かった「先生や他の学生と実際に会うことができる」や、「お互いの反応がわかる」という回答は、確かに、オンライン講義では決して得ることができないものであるため、比べることができないと思われるかもしれない。しかし、2 節でも触れた通り、これらの回答は明らかに「インターアクティブな学習ができる」ということを関連するだろう。インターアクティブな活動がもたらす学習効果が明らかである以上、これはロシア語の講義においては、ロシア語学習におけるメリットであると言えるだろう。また3 節で確認したデメリットに関しても、同じような傾向があると言える。オンライン講義のデメリットとして得られた回答は、明らかに単なる対面講義（ハイブリッド講義）のメリットを裏返しにしたものだけでなく、「（先生も学生も）習熟度が把握できない」や「発音がよくわからない」、「オンラインで会話能力が上がるか不安」というようなオンライン特有の、いわば、ロシア語学習上の不安ともとれるような回答が得られた。それに対して、対面講義（ハイブリッド講義）について得られたデメリットは、「対面の人の声がオンラインの人に聞こえない」という技術的な回答（もちろんマイクを使う等の改善は必要であるが）や「シールドで黒板が見にくい」、「マスクで口が見えず、発音がわかりにくい」という新型コロナウイルス感染予防のためには避けては通れない意見（もちろんこれらについても改善策を考える必要はあるが）であり、ロシア語学習に直接的なものではなかった。以上のことから、京都外国語大学ロシア語学科の学生は、ロシア語学習においては、対面講義（ハイブリッド講義）の方が学習効果が高いと考えていると考えられる。

京都外国語大学ロシア語学科の学生が、ロシア語学習においては、対面講義（ハイブリッド講義）の方が学習効果が高いと考えているということには、4 節で確認した学生のロシア語学習動機とロシア語の学習目標・卒業後の将来設計が大きく影響を与えていると考えられる。佐山（2015）では、ロシア語学習者の動機付けを高める要因として、以下の3つの要因が挙げられている。

- a. 有能性の欲求： 学習者が、ロシア語ができるようになりたい、あるいはロシア語の授業内容を理解したいと感じること
- b. 自律性の欲求： 学習者が、自律的にロシア語学習に取り組みたいと感じること
- c. 関係性の欲求： 学習者が、教師や仲間と、互いに協力的にロシア語学習に取り組みたいと感じること (佐山 2015: 165-166)

表 5 で確認した通り、京都外国語大学ロシア語学科の学生には、「ロシア語を学びたい」という積極的な学習動機を持った学生が多いと言える。これは、a. の有能性の欲求を満たしていると言えるであろう。これは、オンライン講義のデメリットとして得られた「質問がしにくい」や対面講義（ハイブリッド講義）のメリットとして得られた質問がしやすいと関連する。さらに、上述したように「インターアクティブな活動がしにくい」という意見だと捉えることのできる複数の意見は、c. の関係性の欲求を満たせないということを意味する。以上のことから、ロシア語の学習動機を高める欲求をより多く満たし得るのが対面講義（ハイブリッド講義）であると考えられるのではないだろうか。そしてまさにこのことが、京都外国語大学ロシア語学科の学生が対面講義（ハイブリッド講義）の方が学習効果が高いと考えていることに結びつくのではないだろうか。

6. まとめ

本稿では、ロシア語の専門課程における講義について、以下の2点を明らかにした。

1. 京都外国語大学ロシア語学科の学生には、ロシア語学習において、対面講義（ハイブリッド講義）の方がオンライン講義よりも学習効果が高いと考えている学生が多いこと。
2. 1. には、京都外国語大学ロシア語学科の学生に「ロシア語を学びたい」という積極的な学習動機を持った学生が多く、かつ同時に多くの学生が、ロシア語の学習目標・卒業後の将来設計として、ロシア語を活かしたいと考えていることが多いことが関連すると考えられること。

もちろん、本稿で得られたこの結論は、あくまで京都外国語大学ロシア語学科の学生を対象に行ったアンケート調査に基づくもので、決して一般化できるものではない。とはいえ、東洋大学現代社会総合研究所 ICT 教育研究プロジェクトが行った「コロナ禍対応のオンライン講義に関する学生意識調査」では明らかにされなかった外国語専門課程の学生が考えるオンライン講義・対面講義（ハイブリッド講義）への忠実な意見を提示するものとなった。さらに今回のアンケート調査で明らかにした学生のロシア語学習動機やロシア語の学習目標・卒業後の将来設計は、今後の京都外国語大学ロシア語学科での教育の進

むべき方向を位置付ける 1 つの指針となりうるに違いないだろう。

新型コロナウイルス感染拡大の影響からオンライン講義中心という新たな講義スタイルになって以来、様々な意見が飛び交った。例えば、ハイブリッド講義について、「オンラインでやる以上、対面講義とは違うんだと割り切るべきだ。黒板を使うことは諦めよう。」などという意見である。確かに、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、オンライン講義を行うことが避けられない以上、この意見には賛同すべきところもある。しかしながら筆者はこの意見に完全には同意できない。京都外国語大学ロシア語学科の学生のように専門的にロシア語を使用したいと考えている学生にとって、黒板を使えないことはロシア語の筆記体習得の妨げになる。事実、筆者が TA として参加した対面講義では、大学生になって初めてロシア語を学び始めた学生に筆記体を使用している学生は 1 人としていなかった。また対面講義においては、学生の表情を見て、教員が説明を加えるか否かを決定する場面が幾度となく存在した。ネットの接続環境、プライバシー等の問題を考え、カメラを OFF にしたオンライン講義では、このような対応は不可能である。まさに、このことがアンケート調査で、オンライン講義のデメリットとして回答のあった「(先生も学生も) 習熟度が把握できない」を招いているに違いない。またカメラを OFF に設定するということは、同時に、講義への参加意識の低さも誘発する。この参加意識の低さが、オンライン講義のデメリットとして挙げられた「グループワークがしにくい」の原因の 1 つであるだろう。

「オンラインでやる以上、オンラインのメリットを追求しよう」というような考え方は、本当に学習者が求めるものであるだろうか。教育者が一方的に、オンラインにばかりこだわった結果として、「使用するオンラインツールが多すぎる」という意見が、オンライン講義のデメリットとして挙げられたではなからうか。学習者がいて初めて成り立つロシア語教育である以上、本稿で得られた「ロシア語学習において、対面講義 (ハイブリッド講義) の方がオンライン講義よりも学習効果が高いと考えている学生が多い」という結論は、「講義をオンラインで行うにしても、オンライン講義のメリットを可能な限り活かした上で、極力、対面講義に近い形の講義を目指すべきだ」という結論へと繋がるに違いないだろう。

参考文献

- Swain, M. & Lapkin, S. (1998) Interaction and Second Language Learning: Two Adolescent French Immersion Students Working Together. *The Modern Language Journal*, 82(3), 320-337.
- Watanabe, Y. & Swain, M. (2008) Perception of Learner Proficiency : Its Impact on the Interaction Between an ESL Learner and Her Higher and Lower Proficiency Partners. *Language Awareness*. 17(2), 115-130.
- 金子百合子 (2014) 「あなたはなぜロシア語を勉強しているのですかー全国 6 言語アンケート調査結果から届くロシア語学習者の声」『ロシア語教育研究』5 号, 21-41.
- 金子百合子 (2017) 「ロシア語教育のシステム化と教室運営」, 『外国語教育のシステム化と教室運営-英独仏中韓西露日の語学授業とクラス間連携-』
- 佐山豪太 (2015) 「ロシア語学習者の動機づけの構造: 自己決定論における『有能性, 自

- 律性, 関係性』の分析を中心に」, 『ロシア語ロシア文学研究』47号, 163-179.
- 佐山豪太, 宮本友介, 横井幸子, 林田理恵 (2015) 「〈コロキウム-報告と討論〉全国6言語アンケート調査結果(最終報告)とロシア語教育の方向性」, 『ロシア語ロシア文学研究』47号, 382-388.
- 東洋大学現代社会総合研究所 ICT 教育研究プロジェクト (2020) 「コロナ禍対応のオンライン講義に関する学生意識調査」
<https://www.toyo.ac.jp//media/Images/Toyo/research/labocenter/gensha/research/52395/1/questionnaire.ashx?la=ja-> 最終閲覧日 2021 年 1 月 31 日
- 林田理恵, 金子百合子 (2014) 「全国 6 言語アンケート調査結果(第 2 回中間報告)とロシア語教育の方向性」『新しい言語教育観に基づいた複数の外国語教育で使用できる共通言語教育枠の総合研究』, 53-63.
- 宮本友介, 横井幸子, 林田理恵 (2014) 「日本のロシア語学習者の動機づけについて—全国 6 言語アンケート調査結果から—」『ロシア語研究』5号, 1-11.